Feature article

－芥川賞受賞 特集記事－

文学部 文学科 文芸・思想専修 **小野 正嗣** 先生

「余白の大切さを伝えていきたい」

2015.1.22 毎日新聞

「文学は社会の潤滑油」

@大学

芥川賞の小野・立教大准教授 受賞後初の授業

「九年前の祈り」で第152回芥川賞を受賞した小野正嗣・立教大学准教授の受賞後初の講義が21日、同大池袋キャンパス（豊島区）であった。文学部文学科文芸・思想専修の3年生19人から祝福を受け、小野准教授は「今日は立教のスクールカラーでキメてきました」と紫のセーター姿で、学生を笑わせた。

この日の授業は、卒業論文に向けた予備演習で、2人の学生が映画について発表した。

1950年代末から60年代にかけ、フランスの若手が手がけた自由な作風の映画「ヌーベルバーグ」について学生が論じると、小野准教授は、パリで起きた新聞社襲撃事件に言及。「シャルリーエブド」が、学生や労働者を中心に起こった68年の社会改革運動（5月革命）を背景に発刊されたことに触れ、「風刺画と表現の自由が議論を呼んでいるが、そういう問題はこの時代に端を発している。息苦しい時代背景を理解したうえで、作品（映画）を見てほしい」と助言した。

授業を終えた小野准教授は「今後も自分の軸足は研究者・教育者にある」として、「文学は何の利益も生み出さないが、ギスギスした社会の潤滑油になれる。景気のいい時代を知らずに生まれ育った今の学生たちに、『余白』の大切さを伝えていきたい」と語った。

また、小野准教授の指導を1年間受けてきたという中山朝子さんは「どんなジャンルの質問にも的確な答えを返してくれ、膨大な知識にいつも驚かされます。受賞を聞いてうれしかったです」と話していた。【上杉恵子】

芥川賞受賞後初の授業で、学生に質問する小野正嗣准教授（右から2人目）＝豊島区の立教大学で

「グローバル化という巨大なカンナの削り屑」「拾い集め、小さな土地の持つ固有の力を愛おしむ」

2015.1.20 読売新聞

芥川賞受賞に思う 小野正嗣

故郷の凸凹を愛おしむ

フランスに8年近く留学した。パリに着いたとき、自分でも意外なことにあまり驚きはなかった。むしろ故郷である大分県南部の蒲江町（現佐伯市）から東京に出たときのほうがはるかにカルチャーショックは大きかった。パリも東京も大都会という点では同じ風貌をしているように思えたのである。

住人がみな顔見知りで、たがいの親戚の構成や先祖の記憶まで共有している小さな集落に18歳まで暮らした。同級生は18人で、保育園から中学校までほぼ同じ顔ぶれ。蛇行するリアス式の海岸線に沿った道路を通る路線バスで、峠の向こうの県立高校に通った。

自分でもいまでは嘘のようだが、東京で電車通学を始めたころ、習慣で目はつい降車ボタンを探した。切符の買い方、改札の通り方にも戸惑った。

都市に暮らすとは、思考と身体をそこにふさわしく適応・改変させることだ。それは同時に、自分という存在に沁みつく、古里の風土に根付いたという意味での「土着的なもの」を喪失しつつ発見する過程でもある。

そもそも「近代」とは、「中心」である大都市的な発想や生き方が、この土着性を抹消しようとする運動ではなかったか。個々の土地には他とは異なる固有の凸凹があるのに、昨今は、それが「グローバル化」の「効率化」や「標準化」という強力な刃によって、さらに無惨に削られている。

土地はどこに行こうが似たような顔つきになり、人と人、人と世界とのあいだの風通しをよくしていた「余裕」や「遊び」が、「無駄」として切り捨てられる。そのような社会のありように幼いころから晒されてきたせいか、「無駄なことはしたくない」と言う学生によく出会う。

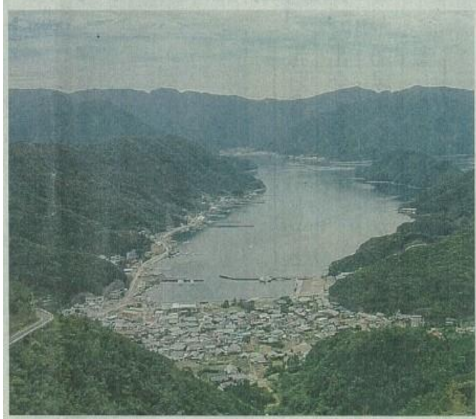
若者に文学が読まれなくて当然である。文学の本質はまさに「遊び」だからである。物語に目を輝かす小さな子供を見ればわかる。何かを学ぶために物語を読む子供はいない。それは無償の行為だ。読むという行為自体が、つまり言葉によって生み出される別の世界に触れることが、それだけで大きな喜びをもたらすのである。

大人が子供を注意する際、「無駄なことをするな」という表現は、「もったいない」、食べ物や品物を粗末にしてはいけない、という意味でよく用いられていたはずだ。それがいつの間にか、手間ひまを省き、効率よく結果を得ることだけが「無駄をしない」ことになり、恐ろしいことに、そのためなら物どころか人間まで使い捨ての道具のように粗末に扱う風潮が蔓延している。

僕がフランスで5年近く居候させてもらった大学教授で詩人のクロード・ムシャールさんは、翻訳や研究を通して世界中の文学を紹介するだけでなく、各地からやって来た貧しい移民や難民を自宅に受け入れていた。多様性の尊重こそが彼にとっては文学なのだ。

人生と文学の師であるクロードにはほど遠いが、僕の場合は、「グローバル化」という巨大なカンナの削り屑を「もったいない」と拾い集め、小さな土地の持つ固有の力を愛おしむことから始めたい。

おの・まさつぐ　1970年、大分県生まれ。作家、立教大准教授。2001年にデビュー。「九年前の祈り」で15日、芥川賞に決まった。



美しいリアス式海岸が続く大分県南部の旧・蒲江町（佐伯市観光協会提供）

「この賞を兄にささげます」

2015.2.24 読売新聞

芥川賞・直木賞贈呈式 小説とは……

一方的に与えるもの 小野正嗣さん

穴を掘っていく作業 西加奈子さん

第152回芥川賞・直木賞の贈呈式が19日、東京都内の帝国ホテルで開かれた。「九年前の祈り」で芥川賞を受賞した小野正嗣さん(44)＝写真左＝は、亡くなった兄と文学への思いを熱く語り、『サラバ！』で直木賞の西加奈子さん(37)＝同右＝は、あでやかな和服姿でも目をひいた。「書き盛り」の2人の勢いを感じさせる式となった。

受賞あいさつで、フランス語圏の文学を専攻する研究者でもある小野さんは、「不在」の文学とも言われるサミュエル・ベケットの仕事について語った。その後、生涯の大半を故郷で過ごし、昨年10月に46歳で死去した兄について語った。

「お人よしで不器用で、子どものころはみんなからかわれていました。怒らない、人の悪口は言わない、勉強はできない、足は遅かった」。それなのに、「漫画も、テレビのチャンネルも、お菓子も全て兄が譲ってくれた。兄がいなくなり、彼は『奪われていた』のではなく、『与えていた』と分かった」と語り、文学とは、そのような「一方的に与えるものだ」と述べた。

受賞作は「間近に迫った兄の死が僕に書かせた小説です。兄は生前、弟に与え続けたのに、それでも足りないと思ったのか、人生の最期に自分がいなくなること、自分の不在そのものによって、なおも弟に与えてくれた。この賞を兄にささげます」と結んだ。

西さんは、選考委員にあいさつした際、みな優しいのに、人間ならざる気配を持つ「妖怪」のように感じ、それは小説を書いてきているからだと思ったことを紹介した。そのうえで、「小説は、自分の内面や身近なもの、えたいの知れない場所に穴を掘っていく作業。直木賞というすばらしい賞をいただき、選考委員の先生に、こっち側に来る覚悟があるのかと問われている気がします。皆さんのような格好いい妖怪になりたいし、大きな穴を掘っていきたいと思います」と語った。

その他、掲載記事多数。

- 「文藝春秋」2015年3月号　P.380～385　**受賞者インタビュー**
- 「文藝春秋」2015年3月号　P.386～447　**受賞者作全文掲載、受賞のことば**
- 「群像」　2014年4月号　P.180～184　芥川賞受賞スピーチ**「与え、与え、なおも与え」**
- 「日本経済新聞」2015年1月16日38面　**「芥川賞に小野氏」**

など